

大唐西域記壁画

この施設には、日本画と呼ばれる絵画のジャンルで活躍する平山郁夫（1930–2009）の壁画が祀られています。平山は、シルクロードの場面を描いた多くの作品で最も知られており、これは玄奘の足跡をたどるために、この歴史的な交易路に沿って150以上の巡礼を行う中でスケッチしたものをもとに描かれています。

薬師寺にある、長さ50メートルの絵画は、「大唐西域記壁画（玄奘三蔵の大冒険）」と題され、「Xuanzang」は「玄奘」の中国名、「Tripitaka」（日本語で三蔵）は仏教経典の伝統的な呼び方です。1980年に開始されたこの絵画には、玄奘の旅を記念した7つの場面が組み込まれています。これらの場面は玄奘自身が記した旅の記録である「大唐西域記」に記されています。

描かれている最初の場面は、西安の大雁塔で、玄奘が17年の旅を始め、終わらせた場所です。塔は、玄奘が持ち帰った経典や仏像を保管するために建てられたという点でも重要です。次の場面は、玄奘が故郷を出た中国の国境を示しており、3番目はゴビ砂漠を描いています。

高昌の王が彼に案内人と馬を提供したものの、天山山脈の4,284メートルあるベデル峠を登り始めたとき、玄奘はすぐに再び一人で旅をしていることに気づきました。その様子が次の3つのパネルの主題となっています。5番目の絵は、玄奘が訪れたアフガニスタンのバーミヤンの岩壁の仏彫刻を描き、6番目の絵は、インドのデカン高原に沈む夕日を描いています。最後の絵は、ナーランダと呼ばれる、古代インドのマガダ王国にあった仏教僧院を描いており、ここでブッダがくまなく勉学に励んだとされています。言うまでもなく、玄奘は仏の足跡をたどり、そこで2年間勉強し、法相派の教えを学びました。絵画は特別な機会にのみ公開されます。